

自分一人では味わうことができなかった荒々しい刺激に、史子は涎よだれを垂らして号泣する。

——苦しい、恥ずかしい、情けない……。

それでも史子は膝立ちになって、腰をくいくいと前後にスライドさせつつける。

「はッ！ はッ！ はッ！ はッ！」

乙女は荒い吐息をもらす。こりっと突っ立った肉芽。史子は自分の体重を微妙に調節して、自らの陰核を押しつぶして快感を楽しみつつける。

そして。

「ああッ……ああッ！ ああッ！」

少女の唇から悲痛な喘ぎがもれはじめる。

——ああ、なにかが……なにかが……あ、熱いなにかが……。

なにかが史子のなかで起ころうとしていた。母親の膣で起こり、妹の梨恵の膣でも起こってしまった、恥ずかしくも神聖な肉の反応。史子は母親や妹のように膣の悦びを完全には手に入れていない。それでも、陰核を擦りつけるだけでも、史子は充分であったのだ。充分に愉しみ、充分に幸福を感じる。

「と……友希君……」

つるつるの股間を露で光らせ、少女は言った。若者はなにも語らず、史子の身体を力強く下から抱きしめる。

かくかくかく……。

繋がった男女は激しく腰を回転させ、自分たちの感じるツボをお互いの性器で刺激し合う。史子は固く目を閉じて、意識のすべてを下半身に集中させる。

「ん、んふー、んふー、んふー……」

乙女の鼻から幸せそうな吐息がもれる。小突かれつづけた少女の子宮のなかで薔薇色をした肉の融合が起こる。瑤子や梨恵を空高くに弾き飛ばした恥ずかしい反応。まるで、きのこ雲のようにして盛りあがる快感の波に史子は必死に抗う。

「あ、ああっ……あひッ！ あひいッ……ひいひいッ！」

抑えつけてもどうしても抑えきれない肉の盛りあがり。史子の魂がふっと空に舞いあがった。

——あッ、イクッ！

史子はその一瞬、愉しげに口もとをほころばせた。純粹な、混じりけのまったくない快感の光が史子の股間奥底に弾けてまばゆく光る。少女のほころんだ唇が苦しげに歪み、そこから悲鳴がもれた。

「あひいっ……ひッ、ひいっ！」

子宮で生まれた絶頂の輝きが脊髄せきずいを通って少女の頭蓋を下から打ち抜く。切なくも甘い一撃に史子は若者の上で股をひろげたまま身体を硬直させる。史子は麻痺した頭で一言だけ呟く。

——い、イッてしまった……。

硬く目を閉じたまま背中を反らす史子。その膣で、二度目の奇跡が起こる。激しく暴れた若者の熱い衝角がこちらもついに終焉のときを迎えたのだ。

「ううっ……」

その日三度目の射精に、菓子職人は苦しそうにうめき、同時に、そのペニスの内側を白い精が駆け抜けていく。

ぶ、ぶび、ぶびっ……。

真っ白い精液は、そのまま史子のなかへと一滴残らずぶちまけられる。

「あ、あうっ……」

史子は鼻の下を伸ばし、眉を寄せたまま自分を汚した若者の上に倒れこむ。少女の中心には、若者の熱い欲望がまだ突き刺さっている。それを見て、周防セルアは満足そうに笑った。

